

開拓の原動力

時は戦前、人々は馬の力で大地を切り開こうとしていた。馬産奨励、馬種改良が行われながら、先駆者たちのたゆまざる努力で開拓が推進されていった。農耕馬として、戦時中は軍馬として姿を変えながら、馬は黙々と人のために働いたのであった。先駆者たちは農業の基礎を築き上げるため、馬と苦楽を共にした。馬は家族の一員として、たくさんの愛情が注がれていた。こうして、開拓の原動力として力を発揮していた大正から昭和にかけて、雄武は馬産地として目覚ましい発展を遂げてきたのだ。一方、大正14年、北海道庁が畜牛増殖計画を公表していた。当時、この公表を皮切りに、雄武でも馬から牛への転換が叫ばれるようになっていた。この計画を背景として、畜牛購入資金の貸し付けが行われ（雄武村農会）、畜牛購入促進が図られた。しかし、馬を愛していた農民たちにとって、馬から乳牛への急速な転換には、強い抵抗が多かった。40頭の購入枠のうち、実際の購入頭数は25頭。当時、村内で飼育されていた一頭の種雄牛だけが、後の酪農の訪れを予期していた。

「食」と「職」

昭和28年から5年間で、雄武町を激しい冷害凶作が襲った。天候不順と重粘土地帯が災いし、開拓者たちの自給自足的な畑作生活は大きな被害を受けた。この冷害を機に、見る見るうちに人の「食」と「職」は変わりゆく姿を見せた。現代は「飽食の時代」と呼ばれ、ごく当たり前のように食生活を営む人々が多いなか、当時は私たちが到底想像もつかないような惨状だった。中心的な主食は、皮肉にも主食「代替」作物。麦類、豆類、雑穀、ジャガイモというものがほとんどで、戦後開拓の時代にいたっては、今のように白い米に恵まれることはなかった。食糧が完全に底をつき、ジャガイモの汁やみそ汁でなく

塩汁を飲む人々。必ず吐くのに関わらず、赤カビ病にやられた小麦を食べる人々。飢えに泣くわが子を抱え、にんじんを果物代わりに与えた。母乳が止まり、代用に小麦粉をしゃぶらせる母の姿もあった。死が面前に迫る中で、その日その日を生き抜くのがやっとの時代だった。この冷害と食糧危機を背景に、次第に農業者たちは「生活の安定」を悲願するようになっていくのであった。

酪農への転機

戦後開拓者の1人、高見秀雄氏（故人）は「開拓地は先人たちが不毛な地として全く開拓されず、軍馬などの放牧地として使用された程度で、全く未開の地であり、私たちが畑を開き、畑の作付けを行えば行う程借金が増えた」と当時を語っている。（開拓農協開拓収束記念誌「拓魂」から）

なぜ、借金が増えるのにも関わらず、開拓者たちは先駆者の道を行んだのか。なぜ、あえて苦しい道を選んだのか。それは自らの「生活の向上」が理由だった。「出取りになった方がよっぽど楽だとも思うが、それでは二度と百姓に戻れなくなってしまう。どんなに苦しくともこの土地で頑張りたい」。苦しみながらも営農意欲を燃やしている者の声（雄武町百年史から）。どん底の生活からはいあるため、先の見えぬ未来に光を見いだしながら、希望を抱きながらこの地を開墾していった。

昭和23年、寒冷地対策として日本全国で最初の大事業といわれた町営酪農事業の実施をきっかけに、酪農経営路線へと転換するようになっていった。馬から牛へと変わりゆく農業事情を背景に、次第に開拓者たちの馬に対する飼養意欲も減退していった。戦後の昭和30年代後半以降にいたっては、著しく馬の数は減少していた。終戦に伴う軍馬需要の衰退、そして、トラクターや自動耕転機などの普及も原因となっていた。農業の世界に「機械化」という概念が取り入れられることで、馬は昔日の面影を失っていった。

馬から牛へ

そして時代は酪農経営へ移行

馬2頭からの開拓

大水 徳光さん（豊丘）

「今日の命の保証のない生活だった」。戦前、根室で炭鉱業務に従事した当時を振り返る。終戦後、炭鉱から人が姿を消し、屯田兵の父と兄、馬2頭を引き連れ雄武に。購入した雄武の25町の土地を耕作した。当時、豊丘地区で「2頭プラウ引き」という概念はなく、すぐに13町の土地を起こすと周囲から驚愕を浴びたという。ササを刈り、焼いて、麦や豆をまくも夏でも寒い気候に頭を悩ませた。雨が降ると、土が硬くて水が流れず自分が食べるための作物が育たない。「食べ物芋が主食だった」。苦しい生活環境の中で「雄武の築港も掘ったさ。トロッコに砂利を積んでコンベヤーであげてやった。食わなきゃ駄目な時代だ」と職を選ぶ余裕がなかったことを訴えた。「内地から来た人は馬の使い方がわからなく苦労していた。そのうち、牛一頭が各農家に配布されるようになった」という。「俺は豊丘では一番牛を飼うのが遅かった。今と違い乳搾りは全部手作業だ。配合飼料はお金がかかるので、草が餌の主流で、乳量もいい牛で8升くらい。馬は毎日の過酷な労働にやせ細ってしまわないために、草だけでなくエンバクも食わせた」。

「馬には世話になった。トラクターや自動車が普及してからもずっと馬を持っていた。絶対に馬を大事にできたんだ」と馬へ懸ける思いを見せる。

